

第5章 日本女子補導団への改組

都市における新たな女子社会教育として可能性を持ったこの運動は1923（大正12年）に日本女子補導団に改組されて再出発した。女子補導会は、1920（大正9）年1月、香蘭女学校を出発点にイギリスの支部としてスタートし、キリスト教主義性格を強く持っており、イギリス人スタッフ中心による活動であり、さらに東京を中心とした限定的な活動であったが、名称も日本女子補導団に改められ、組織も改変され、地方での展開が準備された。本章では、日本として独自の組織を構成した女子補導団の性格と全国各地の組および支えた指導者についての概要を明らかにしたい。以下、第1節では日本女子補導団への改組、第2節『女子補導団便覧』にみる女子補導団の性格、第3節 女子補導団の組織と指導者の概要、の順で考察し、とりわけ2節については、（1）キリスト教の理解（2）神と天皇の位置（3）第一次世界大戦の影響（4）家庭婦人の養成と女子教育、（5）新教育と児童中心主義、の観点から検討したい。

第1節 日本女子補導団への改組

1923（大正12）年、それまでイギリス連盟の支部として活動していた女子補導会は、日本女子補導団として独立し、女子補導会から改組された。総裁には林富貴子（1885～1944）、副総裁に三島純（1901～）が就任し、また、その名称も女子補導会から日本女子補導団へと変わった。1925年3月当時の本部組織は次の通りである¹。

| | | | |
|------|------------------------------|---------------|--------|
| 事務所 | 所在 | 東京都芝区白金三光町三六〇 | 香蘭女学校内 |
| 総裁 | 伯爵 | 林博太郎氏夫人 | |
| 副総裁 | 子爵 | 三島通陽氏夫人 | |
| 役員 | 三島夫人、ミス・ウーレー 桧垣茂、荒畑元、池田宜政 | | |
| 常務委員 | 賛助員より十名、各組より二名づゝ代表を以て組織す | | |
| 国際委員 | 桧垣茂(東京都麻布区飯倉五丁目二十九番地) | | |
| 団長 | ミセス・バンカム(在東京) ミセス・マシユース(在神戸) | | |

総裁の林富貴子、三島純はともに華族女学校（女子学習院）卒業生である（ちなみに、林富貴子の長女（宮原）寿子は戦前、昭和初期にイギリスとアメリカ合衆国のガールガイド、ガールスカウト両本部を訪問した経験を持つが、戦後のガールスカウト日本連盟第2代会長を務め、三島純の長女、昌子（あきこ）は同じくガールスカウト日本連盟第13代会長を務めている）。林富貴子の夫の博太郎（伯爵・1874～1968）は山口県出身の東京帝国大学教授で、南満州鉄道総裁（1932～35）をつとめた。ちなみに同鉄道の初代総裁は東京市長、少年団日本連盟初代総裁の後藤新平である。林博太郎は、教育審議会においても、初等教育・中等教育・高等教育・社会教育・教育行政および財政の五部門

に分けて逐次審議を行った際、委員長として各部門を通じた答申原案の作成を担当している。

三島純は祖父が徳島出身で日本法律学校長、検事総長をつとめた松岡康毅であり、東京帝国大学教授松岡均平の長女である。夫・通陽（1897～1965）は、鹿児島出身で栃木、福島県令、警視總監等を務めた三島通庸を祖父に、日銀総裁を務めた三島弥太郎を父に持つ。通陽は学習院時代BSを日本に紹介した一人と言われる乃木希典、二荒芳徳とともにキャンプ指導を受けている。三島通陽がパリ講和会議に牧野伸顕の随員として滞在していた際、後藤新平の知遇を得ていたことも注目される。補導会から補導団に移行する過程でひとつの契機となったのは、1922（大正11）年5月27日にYWCAで開催された補導会のラリーがあった。このガールガイドラリーはミス・グリーンストリートの帰国送別会を兼ねたもので、東京第1組、2組、3組を中心とした会員が参加し、横浜の在日イギリス人ボーイスカウトの団長であるグリフィン（Mr. Griffen）、少年団日本連盟の三島通陽等が参加し、通陽は妻である三島純にこのラリーを紹介した。三島純自身、「このラリー訪問が後日私が補導団のお手伝いをするきっかけとなりました」²と証言している。

日本のガールガイドはイギリス人宣教師と日本聖公会関係者によって始められた補導会であるが、この他に、日本のボーイスカウト組織である少年団少女部という形での結成も誕生しつつあった。例えばそれは、第4章で述べた小柴博の東京少年団のもとに結成された【余丁町少女団】、静岡少年団の尾崎元次郎によって結成された静岡城内小学校【静岡少女団】である。夫の三島通陽が少年団日本連盟に取り組み、その少女版としての三島純への紹介と捉えることが出来る。

林、三島の配偶者の説明が長くなったが、例えば、博太郎が貴族院議員、南満州鉄道総裁として後藤新平と知遇があり、また教育政策に影響を持つ人物であったこと、通陽が戦前、貴族院議員とともに戦前における少年団日本連盟、大日本青少年団さらに、女子挺身隊等の役職を歴任し、戦後は文部政務次官、ボーイスカウト日本連盟の理事長をつとめたことは、戦前の補導団と少年団、戦後のガールスカウトとボーイスカウトとの関係を理解するうえで考慮しておく必要がある。

日本のボーイスカウトの動向について考えると、1908（明治41）年、日本にボーイスカウト運動が紹介され、1916（大正5）年には初代総長を後藤新平として少年団日本連盟が発足していたが、1922年4月には、静岡で第1回全国少年団大会が開催され、ボーイスカウト、各地の子供会、宗教少年部、日曜学校少年団などをひろく「少年団日本連盟」に統合した。同年には、ボーイスカウト国際連盟に正式加盟した。1923年9月には、関東大震災により少年団・女子補導団による救援・奉仕活動が行われ、「そなえよつねに」の標語がその活動とともに注目された時期でもあった。女子補導会から女子補導団への改組された時期は、少年団日本連盟の統合と発展、三島通陽によるボーイスカウト方式の千駄ヶ谷青年団が発足（1922年）とも符号する。この時期は、イギリスのガールガイド、ボーイスカウトが翻訳段階を経て日本独自の組織として定着した時期でもあ

った。

また、当時、日英同盟関係下において裕仁皇太子の訪英（1921年）、アルバート皇太子の来日（1922年）が行われ、青少年教育に関する日英交流も深められていた。1921年の訪問時、裕仁皇太子はロンドンにおいて、ベーデン・パウエルに謁見し、英国ボーイスカウトの最高功労章であるシルバーウルフ章を贈呈されている。

なお、補導会から補導団へ変化する時点において、メンバーが大きく入れ替わったわけではない。補導会時代の事務局を担っていた人々は、継続して役割を担い続けていく。補導会時代発足時からのメンバー細貝（黒瀬）のぶの証言は次の通りである³。

私がリーダーの時に、林総裁の二人のお嬢様、宮原寿子様と淑子様も入団なさいましたから、総裁ご自身もときどき団の集會にご出席下さいまして家事のことなど、手をとって教えて頂きました。ご旅行先からもおはげましのお便りなど頂いておられます。溝口歌子様（伯爵溝口直亮の長女）と西野邦子様は副組長であつて、香蘭と府立第五、第三（高等女学校）、その他の女学校からも新入団員があり、学習院からも徳川（恵子、良子）様はじめ数名ほど加わり団員等が仲よく団の集會を行つて居りました。（カッコ内著者）

以上、日本女子補導団への改組の背景には、イギリス聖公会系の学校、教会における導入過程を経て、明治新政府関係者の中に生じた新たな青少年教育を標榜した人々と家族、さらに皇室と華族関係者の姿がそこに見えてくる。また、当時の皇太子（昭和天皇）のイギリス訪問とボーイスカウトとの交歓という日英の文化交流も大きな要因として考えられる。後述するが、補導会の発足当時はグリーンストリーの指導のもと、キリスト教信者を原則とした香蘭女学校および聖心女子学院の通学者（在日大使館員の子どもを含む）が多数であったのに対し、補導団になると、女子学習院、東京女学館在学生の会員の中には、キリスト教徒以外、さらに華族関係者の名前も見出すことができる⁴。同時に、東京では、キリスト教系の女学校、他の女学校、府立高等女学校ともに、中産階級以上の限られた少女たちが対象であったことも確かである。

第2節 『女子補導団便覧』にみる女子補導団の性格

ここでは、日本女子補導団に改組された団体の性格、とくに目的と活動の特色について具体的に検討する。その際、1924（大正13）年刊行の『女子補導団便覧』（初版）、さらに女子補導団の形式が日本独自のものとして定着した1933（昭和8）年の『女子補導団便覧』（再改訂版）を双方について考えていきたい。

両便覧において、女子補導団の特色は次の五点から説明できると考える。

- (1) キリスト教の理解
- (2) 神と天皇の位置

- (3) 第一次世界大戦の影響
- (4) 家庭婦人の養成と女子教育、
- (5) 新教育と児童中心主義

なお、これらの特色は補導会から補導団に改められた過程で大きく変化したものである(1)(2)と、もともと持っていた性格が明確に位置づけられた(3) - (5)があることを指摘しておきたい。

(1) キリスト教の理解

1924(大正13)年の『女子補導団便覧』には「女子補導団運動は、最初日本に於ては、キリスト教信者によって始められましたから、キリスト教に言い及した点があります。三つの契約と十の団則は、女子補導団の基礎でありますから、これを固く守ることは、他の国に於ける補導団と一般連絡を保つために肝要ではありますが、日本に於て一つの国民的補導運動を成立せしめんとするには宗教上に立場より『神に対して忠誠を尽す』との約束を為し得ざる場合は、之を変更することを許すも宜いと思はれます。これが為に第一の約束を変更する組には、本書の或る部分は使用随意となります」⁵とキリスト教主義以外の広い可能性を示している。この段階では、補導会時代のキリスト教主義の原則も各所に見受けられ、いわば、「キリスト教主義と日本主義の並存」が見受けられる。なお、昭和期に入ると、この点は「我国では必ずしも基督教に依るものではなく、只女子補導団の運動其物を採り入れ、我国情に相応はしい日本女子補導団を樹立して行くのを本来の目的として居る」⁶と明確と示され、キリスト教団体としての性格から日本独自の定着を図っていくことになった。香蘭女学校から組織が拡大する過程で、イギリスの支部ではなく、日本の団体として改組され、理事者が就任した。総裁、副総裁には当時の「華族」であり、夫が青少年教育関係者である女性が迎えられている。

その後、女子補導団が日本的定着をみせた再改訂版の『女子補導団便覧』の「意義及目的」には次のように説明されている⁷。

女子補導団は、其団員悉くが親愛なる姉妹であり、共に学び、共に働き、共に楽しみ、相寄り、相助け、互に向上発展を計つて行く世界的団体で、且世界的一大運動である。其団員各自は現在よりも更に愉快的な、更に立派な婦女子となる事に努め、善良な国民として、天皇陛下に忠誠を尽し、国家社会に奉仕し、且つ又世界の将来を益々幸福なものにし、世界各国の人々が真に平和裡に提携して、各々の福祉増進に努力する様四海同胞の実を挙げんとする、大きな希望を抱いて働いて居るのである。此意味に於て、此運動はあらゆる境遇の女子に必要であると共に、年齢にも制限を置く事の出来ないものである。従つて英国では、普通団員は満十一歳より十六歳迄であるが、

レンジャース シー ガイズ カデッツ

それより年少者の為にブラウニ、年長者の為にRangers Sea Guides Cadets等特殊の

団が設けられてある。又盲人其他の不具者（原文ママ）、或は病弱者、不良少女等の為にまで、各々適当な団が組織され、あらゆる種類の女子の幸福と向上の為に努力されて居る。

ここでは、天皇への忠誠と国家社会への奉仕を確認しているが、キリスト教についての記述はなく、日本独自の活動であること、同時に国際的活動であることが説明されている。普通団員の他に、ブラウニ、レンジャー、シーガイド（海洋少女団）、カデッツ等の結成の可能性が示されている⁸。

ガール ガイズ

ガール スカウト

女子補導団は英国ではGirl Guides 米国ではGirl Scoutsと云ひ、我国では之を日本女子補導団と称へて居る。女子補導団は其沿革に見る通り、少年団と同じくRobert Borden-Powell卿が創設された団体で、一九〇九年初に英国に孤々の声を揚げたのであるが、爾来各国に於て此運動が行はれる様になつたのである。各国の女子補導団は女子補導団世界連盟によつて一団となり、ベーデン・ポエル卿夫人を世界総団長とし、其総本部を英国に置き、各国相互の連絡を保ち、隔年に国際大会を開催して各国より代表が集会し、本団の運動発展を議する事になつてゐる。

ここでは、イギリスでガールガイド、アメリカ合衆国でガールスカウトと呼称され、日本では女子補導団と呼称して各国独自の個性を持つとともに、源流がベーデン＝パウエルにあること、妻であるオレブ・ベーデン＝パウエルをチーフガイドとして世界連盟が組織され、また隔年に世界大会が開催され、連携がはかれることが述べられている。

（2）神と天皇の位置

世界のガールガイド・ガールスカウト運動にほぼ共通し、団員すべてが暗誦する「契約」がある。女子補導団の「契約」は以下のとおりである⁹。

- 一．私は（神様と）天皇陛下（と）に忠誠を誓ひます。
（但入団志望者の信仰によって「カッコ」内の言葉を省く事が出来ます）
- 一．私は常に人々の補助をつとめます。
- 一．私は団則を守ります。

これは、イギリスのガールガイド規約を翻訳し、さらに補導会の契約を参考にしたものであるが、異なるのは神と天皇への忠誠を誓約する箇所である。ここは英国のボーイスカ

ウトの誓約においては「神および国王陛下に対して自分の義務を尽くす」¹⁰、である。ガールガイド運動は、「大英帝国の母」となるために、もともと愛国主義的な傾向が強く、また英国も日本も王室・皇室と関係が深かった。先に述べたようにイギリスのガールガイド、女子補導会と比較してキリスト教の記述がなく、また「天皇陛下」に比べて、括弧内の「神様」を省くことが出来る。この点、その後、「女子補導団は元来基督教に基いて起されたものであるが、我国では必ずしも基督教に依るものではなく、只女子補導団の運動其物を採り入れ、我国情に相応はしい日本女子補導団を樹立して行くのを本来の目的として居る」¹¹という日本女子補導団での明確な特色として表明されることになった。

なお、先述したように、1920年ロンドンでボーイスカウト第1回世界ジャンボリー開催され、そこでベーデン＝パウエルはワールド・チーフに選出され運動自体が世界規模のものとなっていったが、さらにその国際的發展を目指して、1924年の国際スカウト会議では「スカウト教育はいかなる宗教の上にも成り立つ」という宗教的普遍性が宣言されている(コペンハーゲン宣言)。女子補導団の文書上のキリスト教主義からの脱却はボーイスカウト、ガールガイドの世界戦略が背景に存在したことも指摘しておきたい。

(3) 第一次世界大戦の影響

ガールガイドとボーイスカウトには「Be Prepared 備えよ常に」という共通の標語(スローガン)がある。補導団便覧によると、団員としての第一の義務は「小は日常の出来事において、大は災変等の時、他の人を助ける者となることであって、各自は種々の事変を想像し、其が実際に起ったときには、如何に其に処すべきかを考えて居らねばならない」¹²と示されている。補導団員の心得の具体的例として、第一次世界大戦中にドイツがロンドンに爆弾を投下した際、冷静に負傷者を手当てした若い女性の例をあげ、非常時または日常における冷静沈着な行動と他者への貢献、日々の備えを説いている¹³。

第一次世界大戦は総力戦、科学戦、さらに国家としての思想戦であり、一般市民の総動員と、新兵器の登場への対処、そのための国民意識の向上と愛国心の鼓舞が課題となった。日本においても、日清、日露の両戦役、さらに第一次世界大戦の情報を得て「銃後」の課題と女子教育の重要性が認識されつつあった。ドイツによるロンドン空爆と一般女性の冷静な対処というのは、その象徴的な課題でもあった。ここでも、当時の日本の多くの教育者等と同様に女子補導団指導者にとって、欧米での第一次大戦経験と銃後活動が注目すべきものであったことが確認できる。未婚女性を対象とした処女会と女子青年団の発展過程にも第一次大戦は影響を及ぼしているが、女子教育を以後におこりうる総力戦を想定して再編しなおすことは、この時期の女子青少年団体に共通の課題であった。

(4) 家庭婦人の養成と女子教育

第一次世界大戦の影響は女性の国民意識の高揚を促すものとなったが、この時期の日本には急速な商工業の発展と都市化が進み、官公庁と企業に勤める月給生活者(サラリーマ

ン) とその家族世帯が増加した時期でもあった。都市部の家庭では、性別役割分業観にもとづいて男性は事務所、工場に勤務し、女性は良妻賢母として家事全般と育児、さらに子どもの教育に関与する。雑誌「主婦の友」の創刊に象徴される家庭婦人の雛形としての主婦層が登場した。補導団の目的にも次ぎのように書かれている¹⁴。

女子補導団の目的は、学者、音楽家、美術家、或は体育家等の如き、特殊の専門家を作るのではなく、最も普通の家庭的に完全な婦人、然も各境遇に応じて充分其責務を全うし得るだけの「準備ある婦人」を作る事である。

具体的に、補導団の目指すところは「少女等に真の意味の自尊心を抱かせ、真に国を愛し、身体健全にして勇氣あり、やがてはよき主婦となり、母となり、立派な市民となり、国民となるように指導し、援助する事にある」¹⁵と記される。前述のとおり第一次大戦後、英国のガールガイドは活動内容が変化し、市民としての女性の役割が強調されるようになった。日本の補導団においてもやはり同様に「主婦・母として」であること、同時に「市民・国民として」社会に貢献する能力を持った女性を育成する事を目指していたのである。

(5) 新教育と児童中心主義

女子補導会、補導団は方法としてグループワークの基礎である6人を原則とした班活動のパトロールシステムを取り入れている。班長を班員から選出する児童中心の活動を取り入れており、大正時代に日本に導入され始めた新教育の側面をもつものであった。1924(大正13)年には『ガールガイド教範』が発行されるが、その宣伝文には次のように謳われている¹⁶。

ダルトンプランも、プロジェクトメソッドも、又ウエンネチカシステムも凡ては本教範の生んだ処であり、又現在採用しつつある処であります。

従って本書を読むという事はやがて、現代に於ける新教育の一斑を研究する事になります。遊戯の間に生活を導き、運動の間に人生を教えるなどは、到底の他の企図し得ぬ点で御座います。

以上、多少宣伝的側面はあるにしても、当時最新の教育プランを例にあげながら、新教育としての重要性を述べている。また、学校教育との関係、女子補導団の実践性については、補導団便覧に次のように説明されている¹⁷。

一般の学校教育は、勿論其目的に於て女子補導団の目的と異なるものではないが、只女子補導団は学校に於ける教育を、よりよく消化させ、是を實際生活に織り込み、日々実践させ様とするのである。例へば学校での体操は其時間のみであるが、団員は各自の身体に適応した体操を毎日実行する様心懸け、又衛生に就いての知識を得れば、其を

活用して健康の増進を計り、尚健康の増進は単に自己の幸福の為のみではなく、社会の為に益々多く奉仕し得んが為である事を学ぶのである。其他応急手当や看護法等も、学校の講義のみではいざと云ふ時実際に役立つには困難であるが、団員は平素集会を開く時、課業としてではなく、遊戯として興味深く之等の事を実習し、必要な場合に備へる故、常に実際の役にたつのである。

ここでは、学校教育をよりよく「消化」させる実践的存在であること、体操を例に取って、衛生知識の獲得による健康増進、応急手当と看護への応用による社会奉仕活動に結びつけるという児童の経験を重視した、経験主義の活動であることが強調されている。また、都市生活者に対応した野外活動と自然体験を重視した活動も推奨された¹⁸。

団員は成可く自然に親しみ、単に教科書のみからではなく、実際から活々した知識を直接得る様に努め或は暑中休暇を利用して、静かな山谷に自然を友として、キャンプ生活をしながら心身を練り、動植物の実物観察に依つて自然研究をなし、又完備した台所がなくとも、充分煮焚が出来る事を知り、更に進んでは、人生の何たるかと、吾人の前に横たはる責任等に就いて、愉快的遊戯と談笑の中に、種々の経験を得るのである。

日本初の教育的組織キャンプが大阪 YMCA によって六甲で実施されたのは1920年であり、地域青年団にも田沢義鋪たちによって飯盒炊爨と野外活動が指導され始めた時期であったが、少女のキャンプと実物観察、自然研究も日本では新しい試みであった。

ちなみに、1924年に翻訳、まとめられた「年齢ニヨルガイド教育ノ順序ノ概略」¹⁹を下記に示しておきたい。

「年齢ニヨルガイド教育ノ順序ノ概略」

| | 1. 品性と知能 | 2. 職業と手細工 | 3. 健康とその増進 | 4. 奉仕概念 |
|------|--|--|--|--|
| ブルーニ | 宣誓と規約法則 団旗と国家、定索法 基本信号法、羅針盤 聚集者、観察者、 信号手の技能章 | 裁縫とかがり方 人形の衣服の縫方 点火と茶の出し方 美術家、機械工、 木工師の技能章 | 爪と歯等の保健、呼吸 投げ方と捕へ方 体操 運動家、遊泳家 試合者の技能章 | 緊急救急法 口頭命令伝達法 救急者、家政家 地方の案内者の 技能章 |
| ガイド | 宣誓 ガイドの規約十ヶ条、 自然の研究、 追跡法 分隊の指揮、節儉 | 野営及家庭に於ける料理、 針仕事、 看護法、大工、 小児の看護、 | 競争、跳躍、縄跳び 自己及家庭の衛生 児童の衛生、体操、 乗馬、自転車乗り、 開拓者の技能章 | 事変の取扱い方 地方の案内 救急法、火事の 時の救助、 道案内、病人看護 |

| | | | | |
|-----------------------|---|---|---|---|
| | 美術家、星学家、 動物愛護、音楽家、 通訳者の技能章 | 電気師、洗濯、 漁師、庭作り、 洋服裁縫、写真師 の技能章 | | 等の技能章 |
| レ ン ジ ヤ ー | 討論、 オーケストラ、 合唱等の会合 隊の事務の一、 即、教授、備付、 欸待 | 美術と手仕事 製造、職業、商業 屋内及屋外の仕事 の上級特務 | 競技、旅行、 自転車乗り、散歩、 体操、漕艇、 美術展覧会又は陳列 館等の見学 | 事変救護班、 病院の手伝、 女警察、医薬分配 児童の保健、 仮小屋での仕事、 託児所仕事 |

以上はイギリスと同様に、ボーイスカウト（少年団）の活動を下敷きにしたものであるが、屋外活動については学校教育では少女向けの活動とされていないものが議論の末に補導団の活動に示された。一方、看護、保育、裁縫、栽培活動等についてボーイスカウトとは異なる内容が存在し、少女向けに独自に、料理、洋裁、事務、看護、育児等に関する技能が位置づけられている。一定の性別観を有しながら、当時の女子の活動としては画期的性格を持った「新教育」活動でもあった、といえよう。

なお、第一次世界大戦と並んで、1923年という女子補導団改組の時期は、関東大震災とも重なる。自然災害にともなう都市の脆弱性の発見と、その復興再生にむけた青少年団体への注目も女子補導団の発展と決して無縁ではない。たとえば、当時結成されたばかりの補導団は男子青少年団体とともに被災者への援助活動を行っている。関東大震災の慰霊施設である東京都震災記念堂には今も、「そなへよつねに」の標語が掲示されている。

第3節 女子補導団の組織と指導者の概要

以上述べたように、日本では、大正自由主義教育と児童中心的な教育観が登場し、また中等教育を受ける女子が増加しつつあったこの時期に、聖公会系の香蘭女学校を起点として始められた女子補導会は、日本的な定着が試みられることになった。次の表は、戦前の補導団の組の存在と活動記録が確認できたものの一覧である。組名、発足した年、活動場所、その特色について概観すると次ぎの通りである。詳細は、次章以降で考察するが、年代順に組の結成状況を示しておきたい。

女子補導会・補導団組名一覧

【東京第1組】（1920-）M. グリーンストリートを指導者、バンカムをチーフコミッショナーに、英国連盟の支部として12名で発足。香蘭の各学年生徒と刺繍部員の志望者で構成され、最初の団員は校内で集会をし、「わすれな草」「桜草」という二班から構成される。

T. C. ウィリアムス、A. K. ウーレイ、M. E. ヘイルストン、荒畑元子、細貝のぶ、竹井富美子、櫻井澄子等、多くのリーダーを輩出、1942年まで活動した。

【東京国際組・2組】(1920-) M. グリーンストリートを組長として発足、英国・オーストラリア人少女等、聖心女子学院の生徒と女子学習院の生徒が参加した。1923年に活動停止後、聖アンデレ教会の組が2組になる。

【東京第1組ブラウニ】A. K. ウーレイ、竹井富美子が担当した。遙光ホームの児童の他、教会関係の小学生が入会したが、1932年頃から活動が停滞し、1933年に休会。

【東京第1組b・第2組】檜垣茂(聖アンデレ教会婦人伝道師、東京女学館教師)、細貝のぶ、井原たみ子、英国留学経験した溝口歌子、樫戸けい子が歴代指導者。香蘭の第1組から分かれて発足し、アンデレ教会の家族、教会の日曜学校の子どもが参加した。単独会員、特別賛助会員も参加し、教会信徒としての結びつきが強い。小学校児童を中心に東京第2組ブラウニ結成も結成された

【東京第3組】香蘭女学校のG. フィリップ、三田庸子(香蘭舎監)が中心となり、後に日本女子大の暁星寮におかれた。1920年から集会準備始まる。日本女子大付属女学校生徒を中心として発足。大正末に休会。

【余丁町少女会・第3組】池田宜政が指導者。渡辺ひさ、国木田みどり、田山茂、塚本清、福本八千代、多田まき子の女性教員、バンカム、B. マキムの協力を得る。同小学校は服部蒨校長の下、児童中心主義教育として少年団、少女団に取り組む。震災援護活動でも注目された。小学校の4、5、6年を中心に結成され、少年団のジャンボリー等にも参加した。暁星寮の組活動停止後3組の呼称を使う

【東京第4組】A. K. ウーレイ、M. E. ヘイルストン、関東大震災後は檜垣茂、井原たみ子の指導、D. E. トロット、ポールの協力。1922年10月に平河町マリア館で準備集会。1923年2月に正式発足した。桜、けし、菊、桜、月見草、かんな等の班をもつ組であり、教員人事を含めた香蘭との交流も深かった

【神戸国際組】(1923年-) 松蔭女学校の教職員と生徒が活動していた記録が残されている。1924年に聖公会のミセス・マシュースの補導団に関する講演の記録がある他、上西ヤエ、新井外子、浅野ソワ子(校長の妻)が指導者。須磨、松蔭高等女学校に本部。1928年頃からブラウニのみの活動に。1929年には活動を停止した。

【大連】(1924-) 大連市高等女学校の生徒を中心に、イギリス人宣教師でガールガイド中国支部長・カートリッジの指導で活動した。1928年のカートリッジ帰国後は田村幸子が幹事となった。1931年に活動を停止した。

【大阪一組・二組】(1925年-) 大阪のプール女学校の組み。英国から着任したM. バッグス(Mabel C. Baggs)が結成し、当初、高等科の生徒を対象に活動が行われた(第1組)。さらに1929年来日したA. S. ウィリアムスとともに指導にあたっている。その後普通科の第2組のみに。バッグスは、戦後に再来日し、徳島のインマヌエル教会で団を結

成、リーダーとして活躍している。

【盛岡第一組】（1927年ー）盛岡市仁王幼稚園の組。盛岡聖公会の村上秀久、村上しげ子夫妻が担当し、後、岩泉みどりが指導者。補導団本部との連絡により、1927年に香蘭女学校に勤務して東京1組を担当していたウーレー、ヘールストン、さらに香蘭卒業の桜井国子が参加して発団式を行っている。少年団盛岡地方連盟松岡直太郎が協力している。盛岡少年団の高橋栄造は活動視察のため、1928年に香蘭のヘールストンを訪問している。なお、先述したように、補導会時代の1920年、盛岡で組結成の記録がある。

【大阪四ヶ島】（1929ー）大阪四ヶ島セトルメントの大泉清子が指導者。日曜学校のクリスマス連合等で活動。

【福島第1組】（1929年ー）片曾根村農業公民学校、組長は渡井芳枝。1931頃休会。

【長春】（1929ー）長春高等女学校の生徒を中心とした組。結団式は1929年10月27日。指導者1名、団員6名。組長代理を田中富貴子が務めた。

【日光第一組・ブラウニ】（1930ー）四軒町愛隣幼稚園・四軒町聖公会、1930年4月6日ブラウニ7名入団、日曜学校の中等科の生徒が中心。イギリス人宣教師のハンブレ、木村里代が指導者。後、普通組、日光第1組結成を結成、土曜日午後に活動。

【大宮第1組】（1931年ー）埼玉県の幼児教育の先駆者でもあるE.F.アプタンの開設した保育者養成機関の大宮愛仕母学会で活動。組長は大越房子、加藤きみ子。ウーレイが指導に訪れている。

【沼津第一組・ブラウニ】（1931年ー）清水上聖公会・四恩幼稚園の組。1931年秋に活動開始。T.C.エドリンが担当した。四恩幼稚園の卒園者は若葉会との名で英語とゲームを行った。1933年1月4日にウーレイ訪問している。日本人の指導者は新藤とし子、ブラウニが村山愛子、南岡春枝、佐藤千代子。

【長野第1組】（1931年ー）小県郡弥津村愛シスター会を会場とした組で柳澤けさを、が指導者となった。長野県新張少女団として1931年11月3日発足。ブラウニ、ガイド志望者に分かれて活動した。1932年8月ウーレイが訪れ、ガイド32人、ブラウニ29人が入団式を行った。

【茂原少女団】（1931年ー）香蘭出身で東京第2組指導者でもあった黒瀬（細貝）のぶが指導者となり、1931年6月に活動を開始した。日曜学校上級生等によりツバメ、ハト、カナリヤの班。旭ノ森幼稚園で音楽会、聖ルカ病院看護婦の講習、海軍機関学校生による手旗信号指導等が行われた。

【草津第1組ブラウニ】（1932年ー）聖マーガレットホームで行われ、ネテルトン、本橋たみよ、が指導を担当した。

【草津第2組ブラウニ】（1932年ー）草津平和館、1932年8月発足。マギル邸、平和館にて集会、ウーレイも訪問したブラウニ集会の記録がある。なお、1923年、前橋聖公会時代にマギルを代表とした前橋第1組の記録がある。

【久喜第一組ブラウニ】(1932年-) 久喜幼稚園で始められたブラウニ。日光の牛山(木村) 里代の指導を受け、倉戸としみ、大宮の大越房子、加藤きみ子が協力した。1932年に30名のブラウニが入団した。

【東京第五組】(1940年-) 千住キリスト教会 山口敏子が担当、詳細は不明。

活動内容の詳細は次章以降で各地域、班での活動と指導した人物像を含めて確するが、ここでは全体を概観するために提示した。そこでは、補導団に改組されてキリスト教主義にもとづく運動を変化させた後も、日本聖公会に関するイギリス人宣教師、聖公会教会、学校、幼稚園の教職員が多く関わっていることがわかる。

小結

本章では、日本女子補導会の名称が日本女子補導団に改められ、組織も改変され、地方での展開が準備されたことについて述べた。第1節では日本女子補導団への改組、第2節では、『女子補導団便覧』にみる女子補導団の性格、具体的に、(1)キリスト教の理解(2)神と天皇の位置(3)第一次世界大戦の影響(4)家庭婦人の養成と女子教育、(5)新教育と児童中心主義、第3節 女子補導団の組織と指導者の概要、の順で考察した。

その結果、この時期、日本のガールガイド運動はイギリス支部の補導会から女子補導団に改組され、神と天皇の位置づけに応用性を持たせることが試みられ、キリスト教と日本の天皇制を並存した提示しながら、国家への忠誠と社会奉仕の重要性を述べていることがわかった。また、総力戦、科学戦としての第一次世界大戦を経て変化しつつあった女性像、市民性が反映され、都市に増加しつつあった家庭と女子教育の要望に対応し、児童への注目という意味で、新教育の側面をもった運動でもあったことを確認した。運動の認知と発展をはかるため、華族と教育関係者を本部に迎えているが、活動の基礎となる多くの組単位ではキリスト教主義が堅持され、聖公会を中心とした活動であった。

註：

- 1 「女子補導団成立」『少年団研究』第2巻、第2号・1925年3月27ページ。
- 2 「三島純メモ」ガールスカウト80周年記念事業準備のための証言(2000年)ガールスカウト日本連盟所蔵。
- 3 黒瀬のぶ「私のガール・スカウト体験記」『ガールスカウトの友』No.43、1976年。
- 4 例えば、林富貴子の2人の娘、尾崎三津子、徳川恵子・良子(尾張徳川家)、溝口歌子・直子(伯爵溝口直亮〔陸軍少将〕の長女、次女)など。
- 5 女子補導団本部『女子補導団便覧』聖公会出版社・1924年、7ページ(このハンドブックは、1922年『女子補導会』を全面改訂したものであり、さらに1933(昭和8)年に再改訂版『女子補導団便覧』が発行されている)。
- 6 女子補導団本部『女子補導団便覧』1933年、2ページ。
- 7 同前、1-2ページ。
- 8 同前、2ページ。

-
- 9 前掲『女子補導団便覧』1924年版、21 ページ。
 - 10 前掲『少年団の歴史』171 ページ。
 - 11 前掲『女子補導団便覧』1933年版、2 ページ。
 - 12 前掲『女子補導団便覧』1924年、26 ページ。
 - 13 同前、25 - 27 ページ。
 - 14 同前、3 - 4 ページ。
 - 15 『女子補導団便覧』聖公会出版社・1924年、2 ページ
 - 16 『少年団研究』第2巻、第2号・1925年3月掲載の折り込み広告より。
 - 17 前掲『女子補導団便覧』1933年版、4 ページ。
 - 18 同前4 - 5 ページ。
 - 19 三島純他・ベーデン＝パウエル原著『ガールガイド教範』章華社・1924、120 ページ。